



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3229号 2016.9.1 発行

### 障害年金 厳しい受給条件 「初診日以前から納付」緩和されず

東京新聞 2016年9月1日

将来の不安を吐露する男性=愛知県内で

病気やけがで、障害がある人に支給される障害年金。同じ公的年金でも、老齢基礎年金は受給に必要な加入期間の短縮が予定されるなど、年金を受け取れない人をなくす方向で制度が改められているが、障害年金では状況が異なる。統合失調症を患う愛知県の男性（42）は、二十年近く保険料を納めているのに障害年金を受けられておらず「一定の納付期間があれば給付を認めてほしい」と訴えている。

（諏訪慧）

障害年金は、国民年金や厚生年金から賄われる。受給には、初めて医療機関を受診した日（初診日）に国民年金か厚生年金に加入していて、初診日までに保険料の三分の二以上を納めているのが原則だ。初診日より後に納めてもらえない。

男性が統合失調症を発症したのは、二十三歳で大学院に通っていた一九九七年。二十歳以上の学生に、国民年金加入が義務化された六年後だ。男性は当時、学生に納付義務があると知らず、初診日の時点では保険料が未納だった。

男性のように、学生時代に制度についてよく知らないために未納となり、障害を負ったときに年金がもらえない事態を避けるため「学生納付特例」が設けられたのは二〇〇〇年。それ以前は、親の収入が低い場合などに保険料が免除される制度があった。しかし、男性は免除されておらず、特例が制度化される以前に発症したため、現在も障害年金がもらえていない。

大学院修了後に就職したが、病気によるうつや妄想でほとんど出勤できず、ほどなく退職。その後も就職と退職を繰り返した。無職の期間はほとんどなく、生活は楽ではなかったが保険料は納めてある。学生の未納期間についても「もしかしたら後からでも払えば、年金がもらえるかもしれない」と、さかのぼって納付している。

いまは症状が落ち着いており、アルバイトをしながら実家で七十代の両親と同居。バイト代は月に五万円ほどで、両親の年金が頼りだ。老齢基礎年金は受けられる見込みだが、受給開始まで二十年以上ある。「老齢年金をもらえる前に、親が亡くなったら、どうやって暮らせばいいのだろうか」と不安を隠さない。

#### ◆「後からの納付」に応じる必要がある

「年金は老後にもらうイメージが強いかもしれないが、病気やけがで障害を負う恐れは誰にでもある。未納は危険」。障害年金に詳しい愛知県春日井市の社会保険労務士、鈴木雅貴さん（50）は訴える。

鈴木さんによると、障害年金では「社会的治癒」という考え方がある。通院や服薬をせず、働くなどして健常者と同じような生活を五年ほど送ってから、再び通院を始めた場合



は「いったん治り、その後、再び発症した」とみなし、初診日が再設定される。

しかし、精神疾患がある場合は、服薬をやめると症状が悪化することも少なくなく、「社会的治癒を適用するのは難しい」という。

障害年金をめぐる国は昨秋、初診日を証明する方法を緩和するなど、年金をもらえない人を減らす手立てを講じているが、男性のようなケースでは救済されない。鈴木さんは「初診日以前に未納でも、その後一定の保険料を納付した人にどう応じるかも考える必要がある」と指摘する。

## 被爆地の学生、ドイツの戦争遺跡を訪問 「負の歴史を伝える意識が強い」



東京新聞 2016年9月1日  
ヒトラー暗殺を計画して銃殺刑となったドイツ国防軍の将校をたたえる記念碑を見学する川田さん(左)と河野さん=31日(垣見洋樹撮影)

【ベルリン=垣見洋樹】日本と同じ第二次大戦の敗戦国ドイツは負の歴史とどのように向き合っているのか。被爆地の広島、長崎の学生が三十、三十一日、自国の加害行為を展示するベルリン市内の戦争遺跡を回り、記憶継承の実情を学んだ。

世界的に知られるベルリン・フィルハーモニー管弦楽団コンサートホールの脇に、人種的優生思想を唱えるナチスが何万人という障害者を安楽死させたことを示す記念碑と展示がある。

「街の真ん中に負の遺産が残してある。後世に歴史を伝える意識の強さを感じる」。世界の核兵器の現状を学ぶ若者グループ「ナガサキ・ユース代表団」に加わる長崎大四年の河野早杜(はやと)さん(23)は、自国民による残酷な行為を隠さず示した展示を食い入るように眺めた。

昨年、米ニューヨークの国連本部であった核拡散防止条約(NPT)の再検討会議に派遣され、非政府組織(NGO)会合で日本の歴史教育の現状を発表。長崎県人でも、現在の核保有国や核弾頭数をよく知らない現実にもどかしさを感じ、ドイツの取り組みを学びに来た。

ドイツで平和活動に取り組む若者と対話し「歴史をよく知っていて、自分の意見も持っている。教育や身近にある歴史遺跡の効果でしょう」と語った。

祖父が被爆者の広島市立大四年の川田亜美さん(21)は被爆地の歴史を伝えるサークルに所属。昨年、オランダのアンネ・フランクの隠れ家で、戦争の加害国側のオーストリア青年のボランティアと出会い、戦争遺跡が加害国側と被害国側の交流の場になると実感した。「アジアの戦争遺跡も中国、韓国の若者とともに学ぶ交流の場にはできないのではないか」と語った。河野さんは卒業を控え「学んだことを後輩に伝え、平和活動の継承、拡大に役立てたい」と語った。

## <南風>チャレンジド

琉球新報 2016年9月1日

実家の押し入れから懐かしいカセットテープが“出土”した。幼い私が絵本を読んでいる。たどたどしい声をリードするのは、両親だ。読めない文字の前で無音が続く。しびれを切らして登場する父や母。今でこそ、一人で大きくなったような顔で過ごしているが、家族や友人、多くの方々に助けられて今の私がいることをあらためて痛感する。そのテープの中で、偉人伝「ヘレンケラー」を朗読する様子も録られていた。目と耳が不自由なヘレンケラーは、サリバン先生のサポートのもと、言葉を覚え、自身を表現する喜びを獲得した。目と耳が不自由な盲ろう者の方は増加の傾向にある。全国盲ろう者協会によると、全国で1万4千人、沖縄は209人と推計されており、情報のバリアーのために孤立を余

儀なくされている人も多い。音と光のない世界で、手書き文字や触手話、指点字などを通じてコミュニケーションを図る。取材を通じて出会った宮里進さんは、先天性の病で光を失い、難聴が進行する中であって、現在も鍼灸（しんきゅう）あん摩マッサージ指圧師として治療院を営んでいる。2人の子供を育て上げ、認知症の母親を介護しながら社会福祉向上のために尽力されている。宮里さんからうれしい便りが届いた。第7回全国盲ろう者体験文コンクールで入賞したとの知らせに思わずバンザイした。全国18編から宮里さんから3人が受賞し、沖縄からは初受賞だ。宮里さんの作文を拝読する中で印象深かった箇所を引用する。「米国では、障害者のことをハンディキャップとは呼ばないそうだ、チャレンジと呼ぶそうだ。日本語に解釈すれば、特別に資格を与えられたとの事らしい」。宮里さんの生きざまは、周囲に希望と光をもたらす。もうすぐ始まるリオ・パラリンピックでは、多くのチャレンジドに心からの声援を送りたい。（金城奈々絵、ラジオ沖縄アナウンサー）

### 原発事故 自主避難者の住宅無償提供打ち切り 障害児抱える母子家庭に不安



東京新聞 2016年9月1日  
福島県からの避難者らが暮らしている県営住宅＝前橋市で  
◆「放射能心配 福島へは戻れない」

東京電力福島第一原発事故に伴って県東部に自主避難している女性（40）が、障害児を女手一つで抱えながら今後の生活に不安を募らせている。福島県が全国の自主避難者に続けてきた住宅の無償提供を、来年三月末で打ち切るためだ。群馬県は県営住宅の入居希望者に、定期募集の抽選番号を二つ

与える支援策を提示。しかし、女性の不安解消にはつながりそうもない。（菅原洋）

「小学生の長女は障害があるだけに、放射能の影響が大きいのではと心配してしまう。まだ心配は拭い去れず、福島県へは戻れない。これからどうしたらいいのか」。女性は途方に暮れた表情を浮かべる。

原発事故当時、福島県沿岸部に住んでいた女性は二〇一二年一月、長女への影響を第一に考えて群馬県へ避難。現在は民間の賃貸住宅で暮らしている。

パートの職を得たが、月収は十万円余り。児童手当と母子手当は月に計数万円だ。ただ、家賃は約五万円で、住宅の無償提供が打ち切りになると、生活費などが加われば、家計は赤字になる恐れがある。

福島県は民間の賃貸住宅に入る自主避難者には、低所得者のみ家賃の一部を補助する方針。女性は対象になる可能性はあるが、打ち切り後の二年間限定だ。

「特別支援学級に通う長女は友達ができ、学校にもなじんできた。転校させたくはない」。女性が住む学区には、県営住宅を含めて適当な公営住宅は見当たらないという。

長女から目が離せないため、勤務時間を増やしたり、転職したりするのは難しい。県内には、親類などの頼れる人もいない。

「長女に障害があっても、（住宅の問題では）福祉制度にも助けてはもらえない」。母子の孤立感は、深まっている。

#### ◆実効性ある定住支援策を

全国の自治体は、住宅の無償提供打ち切りに悩む自主避難者たちに対し、さまざまな支援策を打ち出している。

鳥取県は県費を充て、住宅の無償提供を2年間延長すると決定した。東京都は都営住宅に専用枠200戸、埼玉県は県営住宅に優先枠約100戸をそれぞれ設定した。山形県は約50戸の県職員公舎を無償提供する方針だ。

新潟県は公営住宅へ移る場合に転居費用を5万円まで支給する。民間住宅を借り、小中学生がいて転校できない場合には、1万円を補助する。

一方、県営住宅の入居希望者に抽選番号を二つ与えるという、群馬県の支援策はどうか。定期募集は年に4回あるが、利便性が高い人気の物件は倍率が数倍から10倍以上。実際にメリットがどの程度あるのかが不透明だ。

群馬県によると、住宅の無償提供が打ち切りとなる県内への自主避難者は、5月現在で100世帯、計約270人。このうち、民間住宅に62世帯、各市町を含む公営住宅に38世帯が住む。県は今春示した方針通り、転居先が未定などの約90世帯を各市町の協力も得て戸別訪問し、相談には乗っている。

県では大沢正明知事を旗振り役に、深刻化する人口減少社会への対策に各市町村が取り組んでいる。県内への定住を切望する自主避難者たちに、各自治体がどこまで包容力と寛容さを示せるのか。その真価が今、厳しく問われている。(菅原洋)

### 河川氾濫、車の上で救助待つ 避難所も冠水 北海道 朝日新聞 2016年8月31日

浸水した車両＝31日午後3時10分、北海道南富良野町、朝日新聞社ヘリから、時津剛撮影



北海道では各地で河川が氾濫(はんらん)し、住宅や道路、鉄道が濁流に襲われた。

31日未明に空知川の堤防が決壊し、広範囲にわたって浸水した南富良野町幾寅(いくとら)地区。住人の女性(74)は午前5時ごろ、水につかった乗用車の上で、家族5人が身を寄せ合うようにしゃがんでいるのを目撃した。両親と子ども3人で、父親は幼い子ども2人を抱きかかえていた。



水は屋根近くまで迫っていた。ほどなくヘリコプターが上空に到着。次々と引き上げられたという。

女性自身も恐怖の一夜を過ごした。1階で寝ていたが、この日午前1時すぎ、水の音で目が覚めた。ベッドから降りると床はすでに水浸しになっていた。

玄関のドアを開けようとしたが、水圧で開かない。流木や車がぶつかる音が響いた。当時、夫は旭川市に出かけて不在で、家にいたのは女性だけだった。ひざまで水につかりながら2階に避難。その後、「バーン」という大きな音がして玄関が壊れ、一気に水が流れ込んできたという。

夜が明け、水は引いたが、1階の家具はひっくり返って泥だらけになっていた。避難所にたどり着いたのは昼前。「長年住んでいるが、こんなことは初めて。これからどうなるかわからず不安です」

女性の自宅近くにある障がい者支援施設「南富良野からまつ園」でも午前1時ごろ、玄関から水が浸入。職員たちが、1階に個室がある知的障害者ら約40人を2階に避難させた。約20人の職員は一睡もせず、入居者の世話や1階の排水に追われた。同園の熊谷力支援課長(48)は「入居者にいつまでもこの生活はさせられない。早く道路を復旧してもらって数日以内にはなんとか元通りにしたい」と話した。

釧路市の女性（73）は、夫と次男と札幌から帰宅する途中の30日午後6時ごろ、新得町付近の国道で土砂崩れに遭遇した。隣町の南富良野町にある避難所の一つに駆け込んだ。「見知らぬ土地ですが、避難できてホッとしました」

だが、31日未明に空知川の堤防が決壊。避難所の玄関のガラスが割れ、水が流れ込んできた。女性がいた1階は浸水し、2階で明るくなるまで過ごした。ボートで救助され、別の避難所へのさらなる避難を余儀なくされた。札幌に住む長男が迎えに来る予定だが、道路の復旧も進んでいない。「早く帰りたい」

帯広市内を流れる札内川の堤防も決壊した。川沿いの5・5ヘクタールの畑でバレイシヨやビートを作っている高橋孝一さん（68）は31日午前5時ごろ、心配で見回りに来ると、畑は水没していた。「堤防が壊れるなんて……」と信じられなかった。作物被害で約400万円、畑の復元に約500万円を見込む。国からの補助金が上乘せされる激甚災害に「何とか指定してほしい」と話した。

道内では、大樹町などで車が流され、3人が行方不明になっているという情報がある。伊達市では、伊達自動車学校にある倉庫の屋根が台風ではがれ、確認のため屋根に上っていた校長（54）が転落し、意識不明の重体となった。

札幌管区气象台によると、今回の雨は、8人が死亡し、道内で戦後最大の被害となった1981（昭和56）年8月の「56水害」に匹敵する雨だったと説明している。

芽室川の濁流が住宅地に流れ込んだため、避難をした芽室町の会社員男性（59）は「ここに住んで33年になるが、こんなことは初めて」と語った。（坂東慎一郎、池田敏行）



**<台風10号>川沿い立地で悲劇** 河北新報 2016年9月1日  
山に囲まれ、小本川と国道455号の間にある高齢者施設。上流（上）からの濁流に襲われた＝31日午後0時10分ごろ、岩手県岩泉町

台風10号に伴い増水した川の濁流で入所者とみられる9人が犠牲になった岩手県岩泉町の高齢者グループホーム「楽（ら）ん楽（ら）ん」は、山あいの川のそばにあった。なぜ町場から離れた場所に立地されたのか。防災態勢はどうか。高齢者施設の現状に、東北の関係者は「立地条件や避難態勢の見直しは急務だ」と指摘する。

「楽ん楽ん」は町中心部から7キロほど離れた山あいであり、川や国道が縫うように通る。国道沿いの限られた平地には、野球場や道の駅などがあるが、住宅はそう多くない。

グループホームは認知症の高齢者や障害者が少人数で生活する施設。家庭的な雰囲気ですぐすのが特長だ。そのため「本来は地域密着型のサービス。町場から離れた場所は趣旨から外

れる」と言う関係者は多い。

東北では1998年8月、集中豪雨で福島県西郷村の総合福祉施設群「太陽の国」の救護施設が土砂崩れに見舞われ、入所者5人が死亡した。

当時の施設関係者の男性（72）は「グループホームは民間事業者が主体となるのが一般的で、川の近くや山間部といった土地を求めやすい所に立地する傾向にある」と説明する。

防災態勢にも課題がある。厚生労働省などによると、高齢者施設の立地について、災害リスクを踏まえた規制はない。

山形県老人福祉施設協議会の峯田幸悦会長（58）は「少しでも安全な場所に立地させる施策が必要だ」と強調する。避難対策も、災害対応計画の策定や避難訓練が義務付けられる一方、「現場は慢性的な人手不足。小さい施設ほど対応が追い付かないケースが目立つ」のが現状という。

グループホームは国の基準で、利用者9人に対して日中は介護職員3人以上、夜間は1人以上を配置することが定められている。

消防法に基づき、火災を想定した年2回の避難訓練の実施と消防署への実施報告が義務付けられるが、他の災害の訓練は、報告までは求めている。

仙台市は31日、岩泉町の災害を受け、グループホームをはじめ市内約860カ所の介護サービス事業所に、災害時対応の再確認を求める文書を送付した。

「楽ん楽ん」も所属する公益社団法人「日本認知症グループホーム協会」の副会長で、青葉区の社会福祉法人「仙台市社会事業協会」の佐々木薫副会長（58）は「高齢者施設は土地が安いなど防災以外の条件が優先されがちで、東日本大震災では沿岸部で多くの犠牲が出た」と指摘。

「認知症の高齢者は自力避難が難しいからこそ、今後は施設の立地条件や避難の在り方といった安全面を最優先にしなければならない」と話す。

### コミュニティーセンター職員が迫真の模擬体験 鹿沼市、災害時の避難所運営研修

東京新聞 2016年9月1日  
体育館の見取り図に避難者をどのように配置するか真剣に考える職員ら＝鹿沼市で



昨年9月の記録的豪雨などを受け、鹿沼市は、災害時に地域の避難所となるコミュニティーセンターの職員らを対象に、避難所運営の模擬体験を市菊沢コミュニティーセンターで行った。台風などの季節的な災害のほか、突発的な地震にも備えるのが目的。さまざまな事情を抱えた避難者を体育館や教室にどう振り分けるか、参加者は頭を悩ませた。（猪飼なつみ）

鹿沼市は、昨年の豪雨災害で三十二カ所の避難所を開設し、計九百二十六人の避難者を受け入れた。今年四月に熊本地震もあったことから、コミュニティーセンターの職員らが「地震もいつ起こるか分からない」と危機感を募らせ、研修の依頼があったという。

八月下旬に開いた研修には計六十人が参加。七、八人のグループに分かれて、「HUG（ハグ）」というカードの防災ゲームを使った。カードには病気や障害など避難者の事情や、避難所で起きる出来事が書かれ、体育館と校舎の見取り図に避難者をどう配置していくか考える。研修は、午前三時半に大規模地震が起きたとの想定で進めた。

「まずは体育館に通路を作って、避難してくる地区ごとに分けよう」「外国人はどうする？ 障害者は？」。カードに書かれた避難者の対応に参加者は頭を抱え、猫や犬を連れた人が来ると「アレルギーのある人もいるから」と、体育館とは別の教室に配置。妊婦が来たら「上の階の教室だと、また何かあったときに逃げられない」などと考えた。

避難者の対応に悩む間にも、カードをめくれば「トイレが使えない」「毛布が二百枚到着します」など、続々と問題が起きる。参加者は戸惑いながら解決策を出し合った。

カードゲームの終了後、グループごとに対応の仕方を意見交換した。研修を主催した市防災対策室の宇賀神（うがじん）一晃さん（38）が「地震は被害が大きいほど外傷のある人も避難所に来ます。意識のない人を連れた避難者が来たらどうしますか？」と問うと、参加者はまた悩んだ。

宇賀神さんは「抱え込まずに消防や災害対策本部と連携して。日頃から各避難所に合った配置を考えておいてください」と呼び掛けた。

参加した市菊沢コミュニティーセンターの仲田純一所長（52）は「具体的にどうすればいいか分かったので、体験できてよかった。避難者のためにも、なるべくスムーズに対応できるようにしたい」と話していた。

パズル作家 個性びたり 鶴来の事業所 きょうから販売 中日新聞 2016年9月1日



七つのピースを正方形に並べる、LUKAさんのパズル=白山市鶴来本町で

自閉症 LUKAさん

白山市鶴来本町の障害福祉サービス事業所「生きがいワークス白山」に通う自閉症の男性(20)＝野々市市＝が、パズル作家「LUKA」としてオリジナルの木製パズルをデザインした。1日から事業所で販売する。(谷口大河)

LUKAさんは昨年四月から事業所を利用。数学への関心が強く、私物のノートは数式や手描きのパズルの図面でびっ

しり。図面を引くためのコンピューター利用設計システム(CAD)の扱いにも慣れており、製品化されたパズルもパソコンで作図した。

パズルは一辺十四センチの正方形の外枠に、三角形や五角形など七つのピースをはめ込んで、一辺十センチの正方形を完成させる。ピースの並べ方で三十四通りの組み合わせがあるという。

パズルは事業所を運営する建築会社「生きがい工房」の端材を再利用。大工らがピースを切り出し、木工部門の精神、知的障害者らが角の面取りやつや出し加工をして仕上げる。

石原毅施設長(42)は「利用者の個性を広く社会に認めてもらうきっかけになれば。大勢の方が遊んでくれれば、LUKA君のやりがいにもつながる」と話した。

千五百円。売り上げの一部がデザイン料として作家の収入になる。取扱店を募集。問い合わせは生きがいワークス白山＝電076(225)4362＝へ。

障害児、機能回復へ訓練 42年目「リハビリキャンプ」 唐津で5泊6日 自己肯定感



育む場

佐賀新聞 2016年09月01日

トレーナーの学生の支援を受け、体幹を保つ訓練に励む小学4年のアヤト君＝8月19日、波戸岬少年自然の家

頑張った訓練の後はみんなで食事。テーブルを囲む障害児・者、母親、トレーナー



「佐賀心理リハビリテーションキャンプ」が今年も佐賀県唐津市鎮西町の波戸

岬少年自然の家を会場に開かれた。脳性まひなど障害児・者と保護者、学生らが一緒に寝泊まりしながら「動作訓練法」を学ぶ。1975年に始まり42回目。出会いを通じ「できないことではなく、できることを知り、支え合う場」となっている。

「今朝、ひとりで寝返りを打っていたの。ほんと何年ぶりかしら。今回のキャンプの課題(寝返り)をもう達成できました」。8月中旬、5泊6日のキャンプ3日目。脳性まひの19歳の三男と参加していた廣久子さん(55)がうれしそうに報告した。周囲の母親たちも笑顔で応じ、「そうそう、うつぶせのトモちゃん(三男)しか見たことがなかったよね」と喜ぶ。

脳性まひは筋肉の過度の緊張によって実際のまひ以上に生活、運動能力が低下する。キ

キャンプは動作訓練法の実践の場として、県若楠ふたばの会などが夏休みに開催する。今年  
は自閉症やダウン症などの合併症を含め親子16組が参加した。

ふたばの会会長の宮崎里奈さん(45)は脳性まひの次男(15)が2歳半の時、知人の紹介で参加した。「当時は苦悩と葛藤の渦中で、大きくなったらどうなるのだろうと不安ばかりだった」と振り返り、「訓練はもちろん、皆さんがどういう道をたどってこられたのか、教えてもらい、心の支えになった」と話す。

当事者にとっても励みの場となる。鳥栖市で障害者支援のNPO理事長を務める芹田洋志さん(42)や、九州大大学院を修了し臨床心理士となった矢部乃梨子さん(31)は、幼い頃からキャンプに参加してきた。

芹田さんは「自分より動きがスムーズな友達を見て、諦めなくていいんだと知った」といい、「大げさでなく、この場があったから生きてこられた」。矢部さんは「サポートを受けながら自分と向き合う日々は、自己肯定感の面でも意義は大きかった」と語る。

キャンプのもうひとりの主役は、訓練を支援する学生や教育関係者だ。キャンプ長の飯塚一裕愛知教育大准教授は「細かく見ないと分からないけど、1週間でも確かな変化がある。そんな体験を共有することが共生社会の一步になる」。相模原市の障害者施設での事件が障害者観を問う中、キャンプは今年も確かな足跡を残した。

【動作訓練法】機能回復のための集団療法として成瀬悟策九州大名誉教授が考案した。全国各地でキャンプが開催され、障害児・者の保護者でつくる県若楠ふたばの会は夏のキャンプのほか、月例会を開く。問い合わせは宮崎さん、電話090(9724)6089。

## 神奈川) 音楽、年齢も障害も越えて みなとみらいホール 木下こゆる

朝日新聞 2016年9月1日

備え付けのパイプオルガンを持つ、県内有数の音楽ホール「横浜みなとみらいホール」(横浜市西区)。著名な音楽家のコンサートだけでなく、年齢や障害の有無にとらわれない音楽教育にも力を入れている。未就学児も入場できるコンサートや、市民が気軽に参加できるプログラムも。芸術の秋、音楽に親しむのはいかが？



舞台上上がり、パイプオルガンの音色に合わせてパラバルーンを上下させる体験も＝6月、横浜市西区

「低い音が胸に響く。高い音もすてき。ピアノより好きな音」。市立盲特別支援学校(神奈川区)中学部の18

人が次々とパイプオルガンの前に座る。知っている曲を弾いたり、オルガンの特徴である「ストップ」を動かして音の変化に驚いたり。ピアノを習っている率も高く、高さ12メートルのオルガンに向かって壮大な曲を披露する生徒も。

同校の「パイプオルガンワークショップ」は、2010年から続く。ホールオルガニストの三浦はつみさん(56)の案内で、音色に合わせてリコーダーや打楽器を演奏し、パイプが並ぶオルガンの裏側まで探検。



月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も  
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行